

ゼミナールの肖像 6: 大川政三ゼミナールと水泳部

昭和後半の一橋大学点描

内藤 忠顕

日本郵船株式会社 取締役会長(昭 53 経)

昭和 53 年経済学部（大川政三ゼミ、水泳部）卒業の内藤です。日本製鉄会長の進藤孝生先輩より本誌への寄稿のお声掛けをいただきました。気が付けば私も「前期高齢者」に仲間入りする年齢になり、過去を振り返る余裕も出て参りました。いただいたこの機会を利用して青春の思い出である部活動やゼミナールなどをはじめとする大学生活について書かせていただくことにします。

格調高い本誌には相応しくない拙い内容ではありますが、皆様のご参考となれば幸いです。

1. プロローグ：大学入学まで

生まれは愛知県名古屋市千種区、ごく平凡なサラリーマンの家庭に 1955 年に生まれ、一橋大学に入学して東京に出ていくまで小中高をこの地で過ごしました。1955 年の日本の人口は 9 千万人、世界は 27.7 億人とまだ少なく、伸び代が多くある可能性にあふれた時代でした。当時の世相に関して、とりわけ記憶に残っている事柄が二つあります。

一つ目は 1964 年の東京オリンピックです。当時小学校 2 年生の私の通学路に電気店があり、大事な試合がある日は家に帰る時間が惜しくてその電気店の前で皆と一緒にテレビに見入ったものでした。今思えば、第二次世界大戦で敗戦した日本が、経済分野で世界に挑戦する姿と東京オリンピックで戦う日本人選手の姿が重なり、日本全体に異様な興奮を生んでいた、幼心に私もそれを敏感に感じていたようにも思います。

もう一つ、強烈に印象に残っているのが中学生の時に同じくテレビで目にしたアポロ 11 号のニュースです。アームストロング船長が月面を浮遊するまるで映画のような映像が、作り物ではなく今現実起こっており、この歴史的瞬間を目の当たりにしたことに、科学の発展に対する驚きとともに妙な誇らしさを覚えました。

高校は、運良く地元の有名校であった愛知県立旭丘高校に入学することができました。高校入学当時（1971 年）は学園紛争の気配がまだ校内に残っており、クラブハウスには角棒とヘルメットが置かれ、入学早々度肝を抜かれた記憶があります。学校の教育目標は「真理



と正義を愛し、自主自律の精神に充ちた心豊かな生徒の育成を期し高等学校としての全人的完成教育を行なう」とあり、旧制愛知一中の良き伝統、自由闊達な校風を引き継いでいました。例えば学校祭は前夜祭から討論会、分科会、体育祭、後夜祭まで6日間続きます。当時は難しいものに挑戦することが格好良いことであり、堀田善衛著『インドで考えたこと』を読み触発された直後でもあったため、分科会でインド哲学の講座を主催することしました。紹介状もないまま名古屋大学の先生と連絡を取り大学の研究室を訪問し、幸い講演を快諾いただきました。インド哲学における自己と自我の違いなどについてご講義いただき、日常とは違う異質なものに触れ思索する体験を得ることが出来ました。

周りを見渡してみると、クラブ活動に没頭する者、背伸びをした太宰治風の小説を書いている者、左翼系の組織に入る者、社会人の年上の女性と付き合う者、受験勉強に全てをかける者等々で毎日が刺激的。私自身はどちらかといえば地味な方で他の同級生ほど豪快なことをする度胸はありませんでした。しかし、16歳から18歳の多感な時期に自由に物事を考え、思うように行動できる環境に身を置いたことで、あまり人の顔色を窺わずに動くための土台が形作られたように思います。

こうした自由な高校生活を満喫していましたが、後半になるとさすがに進路を意識するようになりました。当時文系、なかんずく社会科学の分野では法学部が花形でしたが、私はあまり興味を持たず、学部を決めかねていました。そんな時、授業で19世紀初頭のイギリスの経済学者、ジェレミー・ベンサム思想に出会います。ベンサムは「最大多数の最大幸福」を唱え、各個人の幸福の総和が社会全体の幸福にあたり、社会全体の幸福の最大化を目指すべきとの考えを示したと教えられ、この話がなぜか私の心に残りました。当時は、過激派と言われる人々が暴力によって社会を変革しようとして社会問題化していました。有名な“あさま山荘事件”では自分より少し年上の若者が連合赤軍を名乗り武装闘争を開始、最後は山深いあさま山荘に立てこもり警察と長時間にわたり対峙することになります。1972年高校二年生のことです。その衝撃的な報道はテレビで生放送され私もテレビの前に釘付けになりました。自分も若者の一人として既得権益に立ち向かい、社会を変革するという熱い思いに共感するところもありましたが、一方で、暴力による社会変革はあまりに前時代的・野蛮ではないかと違和感を抱きました。中国の故事でも「恒産なくして恒心なし」と言いますが、ベンサムの社会全体の幸福の最大化を目指すためには、社会の基礎を支える豊かな経済を実現すること、資本主義を否定するのではなく活用することでより多くの人を幸せにすること、これも一つの正義ではないか、と漠然と考えるようになりました。京都大学は旭丘高校と同様に自由闊達、破天荒なインテリのイメージがあり惹かれていましたが、当時はマルクス経済学が主流であり、その上先鋭的な過激派が「資本主義を打倒する」などの勇ましい掛け声とともにバリケードを張りストライキをするなど血気盛んな様子でした。一方、価値判断には立ち入らず、より具体的な数理モデルによって経済活動を説明する近代



経済学を中心に据えた大学がありました。一橋大学です。時代の空気に多くの若者が熱に浮かされる中、独自路線を貫く姿が、私には新鮮に映りました。

受験も差し迫った12月初め、候補の大学を一通り見てから志望校を決めようと思い、いくつかの大学を回った後、中央線に乗り一橋大学に向かいました。都会の喧騒を離れ、イチョウで黄金色になった大学通りを歩き、ちょうど正門に着いた頃は夕暮れ時。傾いた陽が図書館の時計台に影を落とし、落ち着いた、ゆったりとした時間が流れていました。ここで学生生活を送ればどれだけ素晴らしいか、と時計台の前に立つ将来の自分の姿を想像し胸が高鳴り、その後の受験勉強は一橋大学を第一志望に据えて頑張りました。

合格発表当日、正門近くから遠くにある掲示板が見えます。心の準備をする間もなく上から3番目に自分の番号を見つけ、嬉しかったことが昨日のこのように思い出されます。

2. 一橋大学（前期）水泳部中心の生活へ

首尾よく一橋大学に入学し前期は小平での生活が始まります。この年1974年の日本の人口は1億1千万人、世界は40億強。生まれた年と比較して、20年経たない間に日本の人口は20%以上増え、世界人口に至っては30%以上の増加です。1960年代は、総人口に占める若年層の割合が増え社会の不安定要因が高まる時代でした。60年代後半に米国ではベトナム反戦運動、日本では70年安保闘争と学園紛争が起きます。しかし、70年代に入ると日本社会も豊かになり、学園紛争も次第に下火になっていきました。

大学生生活の初めは、憧れの国立ではなく小平での生活です。多少の落胆はありましたが、東京に出て新しい生活を始めたことで高ぶる気持ちが勝りました。

この時はまだ高校生時代に抱いた「人が幸せになるために経済を勉強しよう」との思いが強く、鼻息荒くサミュエルソンの『経済学』などを買い込みました。真新しいベージュ色の表紙を開き、どきどきして早速読み始めたものの、高校を出たばかりの自分には難しく、早々に挫折してしまいました。

代わりに（はなっていないかもしれませんが）、持てる体力の大半をささげたのが水泳部の活動です。高校では地学部にも所属していたので、大学では体を動かすクラブに入りたいと考えていました。授業が終わった後、先輩らしき人に部室に招き入れられ、水泳部の活動について説明を受けた後、明日からお試しで水泳部に来てはどうかと勧誘を受けます。この先輩らしき人が実は同学年で、のちに水球の国体最優秀選手となるS君だったとはこの時は知る由もありませんでした。小学校はほぼ毎日近所のプールで泳いでいたことや中高も水泳部でない割に水泳が得意という自負があったため、なんとなく入部を決め、これも縁だったのでしょうか、気がつけばこのプールでそのまま4年間過ごすことになりました。入部当初はただ水の中で浮かんでいるだけでも、受験勉強が終わった解放感と水中の無重力感が相まってじわじわと幸せがこみ上げてきました。しかし、その幸せをかみしめていられたのも束の間、高校時代に運動部を経験していなかった私は練習についていくだけでも厳しく、



4月の連休合宿では疲れ果てて夕食が全く喉を通らなかったことを覚えています。

一橋水泳部には水球競技もあり、私は専らこちらに注力しました。水球の知名度は日本ではあまり高くありませんが、1900年の第二回オリンピックから正式種目になっている伝統あるスポーツです。水中で立ち泳ぎをしながら行うハンドボールを想像していただければ大体イメージ通りだと思いますが、ポイントはその激しさです。「水中の格闘技」の別名を持つ通り、ボールを持っている相手を掴んだり蹴ったりというプレーはよほどひどくない限りファールにはなりません。大学レベルですと技術面以上にポジション取りや心理戦（相手への圧迫感）、体力や粘りが重要になってくるため、大学からのスタートでも競泳ほどはハンデを感じませんでした。[余談ですが、合宿時にその日の練習の最後に、学年に関わらず全員で25メートルを泳ぎ、早い人から練習が終了するというのがありました。1年生の時はもちろんのこと、高学年になっても私はいつもビリ近くで最後まで残って泳いでいたという苦い思い出もあります。]あまりにしんどくて辞めたいと思う日もありましたが、あきらめずに食らいついていると時には水球で点を入れたり、ディフェンスで活躍できたりといったラッキーデーもあり、何とか水泳部を4年間続けていくことができました。

また、新入生にも関わらず勝手に勧誘活動を行っていた三枝君、子供の頃より水泳で好成績を上げていた伊藤君、松井君らが在籍、初心者組では稲垣君、中尾君の頑張りもあり、更にOBの関根監督の厳しい中にも愛のあるご指導もあり、部にとっても活気があったことも部活をやめにくかった一因だと思います。今となってはこの時に逃げ出さなかった経験が一つの自信になり、その後の人生を支えてくれたので、当時のメンバーには本当に感謝しています。

3. 一橋大学（後期）大川政三ゼミ

3年になり、ようやく憧れの国立キャンパスでの生活が始まります。ゼミ選択にあたっては高校時代に抱いていた「全ての人が総和として最大の幸せを得るにはどうしたらいいか」という観点から、財政学・公共経済学に興味を持ち、大川ゼミを志望しました。大川政三先生は当時55歳、財政学がご専門で木村元一先生から続く一橋の財政学の本流を守り発展させるという気迫が感じられました。普段は田舎の校長先生のような教育者らしい趣の温厚な方でした。大川先生は水泳部顧問もされており水友会（水泳部OB会）の集まりで既に面識もあり、学生に優しく接してくださる御人柄にも惹かれてゼミを志望しました。入ゼミ希望者は、財政学に関する小論文を提出し、その後面接を経て合否が決まるのですが、面接では、先生より「水泳部顧問だからといって入ゼミを希望したのではないよね」と問いかけて返答に窮したことを覚えています。苦し紛れにもごもごと答え、先生にはお見通しだったと思いますが、定員15名程度のところ大川先生の温情により応募者20名全員が合格となりました。

3年次では、Richard Musgrave 著 *The Theory of Public Finance* をテキストにゼミで輪



読し、重要箇所を討議する形で進みました。本書は1959年に執筆されたものですが、従来の財政学が制度的、歴史的に国家管理の手法である「官房学」を学ぶことに主眼が置かれていたのに対して、財政学の分析に理論・科学が重要と問題提起した画期的な本となりました。人によっては財政学におけるケインズ革命に匹敵する本とも評する方もいるようです。租税論を中心に国家のファイナンス・調達をみているだけでは政府の経済活動は分からない、財政の機能・予算政策の目標として資源配分の調整・所得と富の再分配・経済安定化の3つの項目を定め政策の有効性をみていこうとする考えです。ゼミナールは週1回90分、事前にテキストの予習とポイントの整理をして臨みます。水泳部中心の生活を行っていた私には輪読についていくのが精一杯で、他のゼミテンの議論を感心して聞いていました。

4年次は、加えて卒論の指導を受けることとなります。卒論は財政学、公共経済学の範囲で各自が自由にテーマを設定し、大川先生より論文作成の指導を受けます。私は、1977年にアメリカ大統領に就任したカーター大統領が提唱・実施していたゼロベース予算制度に関心を持ち卒論のテーマに設定しました。ゼロベース予算とは、過去の実績に基づかず、ゼロから新たに計画を策定し、内容を分析・比較検討のうえ優先順位を付けて予算を配分する方式です。利点としてはコスト全体をコントロールした上で効率的に配分できる点が挙げられますが、どうしても理論が先行してしまい実態を反映しづらい、策定に時間がかかるなどの欠点もありました。予算の配分を通じて社会幸福の最大化・全体最適を目指しており、経済学を志した原点であるベンサムの「最大多数の最大幸福」を制度として実現することを目指している点に共感を覚えました。この制度はカーター大統領の肝いりで開始したばかりの段階で、関連資料はそれほど多くありません。現在のようにインターネット検索で最新の情報を取得することもできない時代でしたので、どのように資料を集めるかが大きな課題となりました。色々と考え図書館に通うものの成果が得られず肩を落としていると、大川先生から現在のアメリカンセンターJAPANに行けば情報が得られるかもしれないと助言頂き、港区まで探しに行ったことを覚えています。理論上はゼロから予算を見直すのですが、これは現実的ではないのでカーター政権も試行錯誤を模索しておりました。そこで、継続案件のすべての項目につき、例えば80%分の予算を認めた上で残り20%部分にゼロから優先順位を付けて予算配分をしていく現実的な方法をとっていたと記憶しています。これを毎年繰り返すことにより、変更による大きな衝撃を回避しつつ変革を生み出すことができる、という利点がありました。こうした予算の作成方法は、現在でも会社管理の世界ではZBB（zero base budget）として教材等に出てくる考え方です。限りある資源の配分を工夫し目的を達成するための最適な効果を出していくことは、官公庁のみならずあらゆる組織にとって重要な課題です。卒論で考えたことは、会社運営の中で多少は役立ったかと思います。

卒論の詳細は忘れてしまいましたので、拙稿を書くにあたり現物に当たるため一橋大学附属図書館にある卒業論文の閲覧を試みましたが、新型コロナウイルス感染防止の観点より閲覧することができませんでした。抽象的で稚拙な論文だったに違いありませんが、コロ



ナ禍が終息した暁には昔の自分に会う気分で見たいと思っています。

ゼミでは、国立での勉強の他に夏の合宿、秋のゼミ旅行や三商大の交流ゼミ等がありました。特に記憶に残っているのは水泳部で一週間の夏合宿を終え、そのまま疲れた体で河口湖でゼミ合宿に参加した時のことです。合宿最終日の打ち上げでお酒を飲んでいたところ、急に意識を失い倒れてしまいました。誇れる経験ではありませんが、生まれて初めて頭も体もキャパシティの限界まで達していたことに気づかされました。

学生時代はゼミの活動に全力投球したとは言い難い私ですが、卒業後の同期会は都合をつけて参加するようにしています。近年は毎年開催され、むしろ卒業後の方に交流が深まっているように思います。話す内容は学生時代の話、仕事の話、自分や家族の話、社会動静の話など、大方がたわいもないことですが、長年の友人たちとそれぞれの人生の山谷を共有し、刺激や元気をもらえる大切な集まりになっています。これも、いつも幹事をしてくれている中井君のお蔭と深く感謝しています。

4. 在学中の世相と思い出

生活の中心は部活動、ゼミも少々といった具合の学生時代を送ってきましたが、このほかにもいくつか印象深い出来事もありましたので、思いつくまま書かせていただきます。

<一橋祭と暴走族>

今は下火になりましたが、私の在学中には暴走族が社会問題化していました。車両を改造し意図的に大きなエンジン音や大音響のホーンを鳴らし、集団で蛇行運転をしながら街中を走っていました。時としてグループ間や一般の人々との暴力行為も起こし怖い存在でした。

1977 年の一橋祭だったと思います。一橋祭は市民参加の大掛かりな催し物ですので、会場での混乱に備え体育会で警備を担当することになり、水泳部も警備に加わりました。開催中の昼過ぎ、屋台が並ぶ時計台の前辺りで怒号が聞こえ、パンチパーマの若者達が騒ぎ出しました。警備の運動部の面々も集まり取り囲みます。騒然とする中、水泳部伊藤君が騒ぎの渦中に飛び込みます。彼は「リーダーはどいつや」と大声で話しかけ、出てきた若者に「まあしゃがめや」と指示して自分もしゃがみます。これに続けて「大学というものは自治を尊重しており騒動があってもできれば警察を入れたくない。もし君たちがこれ以上更に暴れるようなら警察を入れざるを得ない。リーダーのお前が良く考えて返事をしろ」と媚びず臆せず、しかし一定の敬意をもってしっかりした声で呼びかけました。彼の迫力に押されたのか、リーダーが「お前の顔に免じて今日は引いてやる」と言って去っていきました。

それから 15 年後、私も海外駐在員時代に荷物を買付けに来た方に高級ホテルのスイートルームに呼び出され、分厚い現金の束とともに「御社の人間は信頼している。お金を預けるので船積後に荷主にそのお金を渡してくれないか」と強面で持ち掛けられたことがあり



ました。日頃の仕事では有り得ない事例でもあり返答に戸惑いましたが、その時、この一橋祭での一件が頭に浮かびました。そして信頼関係とは関係なく、法に抵触することは行えない旨を丁寧に、誠意をもって説明したところ、相手にも意思が伝わったのか揉めることもなくご理解いただけました。平穏な会社員人生の中での恐ろしい体験でしたが、相手が誰であれ、下手にうまく立ち回ろうと小細工をするよりも毅然と筋を通すことで路が開けるということを学びました。

<米国留学>

3年生の時、初めての海外旅行で米国に行きました。高校の友人に紹介された国際生活体験協会という社団法人による派遣です。この協会に応募した10名がひとつのグループとなり、自分達だけでグレイハウンドバスを乗り継ぎながらアメリカ大陸を横断。途中、南部ノースキャロライナ州立大学で語学研修を受け、中西部アイオワ州シーダーラピッズ市近くの小さな町でのホームステイをすることで、初めての国際交流を体験します。当時の米国は73年ベトナム戦争からの撤退や74年ウォーターゲート事件によるニクソン大統領辞任などの余波で米国政府に対する国民の信頼がまだ揺らいでいる時でした。私が訪米した時は、米国各地で建国200年祭(Bicentennial 1976)が開催されており、混乱を克服して国の団結を取り返そうと盛り上がり、赤と青の色で星形の形を作る200年祭ロゴが、雑誌、切手、コーヒーカップなど至る所につけられていました。分断に揺れる今のアメリカに比べると健全で建設的だったと感じます。

さて、アイオワ州の小さな町での体験談です。地元紙に日本人の来訪が伝えられていたためでしょうか、街を歩くと良く話しかけられます。話題は、日本人は生卵を食べると聞いたが本当か、日本では鶏1キロ幾らか、等々で国際関係や経済問題とは関係のない自分の身の回りの事ばかり。日本と中国、韓国との違いなど、アジアのことはほとんど知りません。牛乳配達に付き合ったところ、コーン畑にポツンと一人で住んでいるお婆ちゃんが出てきてびっくりしていたら、向こうも知らないアジア人が出てきたのでより一層びっくりして笑ってしまったこともありました。アメリカといういわゆる「人種のるつぼ」のイメージを持っていましたが、当時のアイオワ州は白人が大半、農業が主産業で保守的な土地柄でギャップに多少困惑しました。しかし人情に厚く、別れ際には涙を流して送ってくれた人もいたことも非常に印象的でした。

一方、サンフランシスコやニューヨークなどの大都市に滞在した際は、都会の人の服装や身なり、人種構成の多様さにこれこそアメリカだという高揚感を感じます。また、ノースキャロライナでは大学教授が大きなアイスクリームを人前にかぶりついていたこと(当時の日本では大人の行動としては少し恥ずかしいという空気がありました)やピザの大きさ、こぼれんばかりの具材の豊富さに衝撃を受けました。バスステーションで食事をするだけでも、西部、南部、東北部、中西部では話す言葉も雰囲気も違っており、同じ国だとは信じら



れないほどでした。国が集まってできた「合衆国」なのだと初めて合点が行きました。

初めての海外は、何もかもが新鮮な印象として頭に残るもの。私のアメリカは、とてつもなく広く、豊かで、雑多で多様な人々が思い思いに生活している国です。大学で東京に出てきて世界が広がった気でいましたが、本当の世界はもっともっと広いと痛感させられた旅でした。

<中国の転換点>

米国が反ベトナム戦争で混乱している中、中国にも大きな変化がありました。まず 1975 年、中華民国（台湾）蒋介石総統が亡くなります。翌年の 1976 年 1 月に今度は中国共産党周恩来首相が、9 月には毛沢東国家主席が相次いで逝去されます。更に 10 月には江青女史ら四人組逮捕が続きます。毛沢東死亡のニュースは、下宿 1 階の郵便物受けに入っていた新聞の大きな写真入り見出しで知ります。部屋に戻ることなくその場で記事を読み、一つの時代が終わったとの感慨がわいてきました。1972 年に日中国交回復が行われていましたが、当時の中国の実態はまだベールに包まれたままです。毛沢東思想のもと文化大革命が進行しており若い紅衛兵が“造反有理”と叫び権威・権力をなぎ倒していく様を映像で見て興味が沸きます。また、学校で習った日本史は江戸時代を除いて中国との関係が大きな部分を占めており、できることなら一度は行ってみたいとも考えている時でした。そんな時に、日中戦争とその後の中国・台湾を作った大人物が相次いで亡くなり、中国の中枢部にも変化の兆しが起きています。中国が改めて混乱の社会になるのではないか、それを日本や世界はどう受け止めるのか、さまざまな思いが頭をよぎります。中国が 35 年後の 2010 年に世界第二の経済大国になり、今は世界第一位の米国にも迫ろうとしています。この時はそのような姿になると全く想像すらできませんでした。歴史のうねりを示すニュースでした。

5. 就職活動

4 年生の春、社会人となっている水泳部の先輩が部室を訪れ就職の話がされた時に、初めて日本郵船という名を聞きました。歴史のある海運会社と聞いて子供の時の情景が浮かんできました。父の会社の保養所が知多半島の内海（うつみ）にあり、毎年夏休みに遊びに連れて行ってくれました。綺麗な白砂の海岸線が続きその沖には大きな船が行き交うという子供の頃の良い思い出です。縁あって大学では水泳部。やはり水泳とか海とか水に関連する事が好きだな、一つでも自分が好きな事に関係する職業ならば、途中で辛いことがあっても耐えられるのではないかと思い、海を商売のフィールドとする海運会社を就職先として考えるようになります。当時は、昨今の学生と違い、その会社が何をやっているか将来性はどうかなど会社研究はさほど行わず、選択を行っていた気がします。金融、保険、商社志望が多い一橋大学生の中で、海運会社は比較的異例の選択だったかもしれません。他社の内定が出てどちらを選択するか迫られている中でも、日本郵船はのんびりした会社でなかなか内



定を出してくれませんでした。焦りましたが最終的に内定が出て安堵し、大川先生に内定の報告に上がった時、「しっかりしたい会社だよ。頑張りなさい」とお言葉を頂きました。

6. エピローグ：一橋大学、ゼミナールについて今思う事

大学を卒業して40年以上が経ちました。大学にいたのはたった4年間でしたが、その後の人生において大学時代の経験や友人によって助けられ、また勇気づけられたと思うことが何度もありました。還暦を過ぎて感じる一橋大学の魅力は、この三点に集約されます。

- 優秀で粒のそろった学生が集まっている。
- 学生数が少ないため、無理にガツガツしたり自分を大きく見せる必要がなく、自然体でいられる。
- 学問はもとより、スポーツ、留学、校外の活動、社会貢献など、やりたいことは何でもできる環境が揃っている。

「如水会」の由来である礼記の「君子交淡如水」（君子の交わりは淡きこと水の如し：才徳のある者の交際は水のようにさっぱりしており、濃密ではないが長続きする）の通り、大学時代の最大の財産は一生続く友人を得られたことに尽きます。前述の水泳部、ゼミの集まりの他、なぜか軟式テニス部の同期会にも参加させてもらっています。また、ドイツに駐在していた際にも、異郷の地であって小平や国立のローカルトークで一気に距離が縮まる経験をし、如水会の居心地の良さを実感しました。

逆に言えば、課題としては同質性が高く、多様性に欠ける点が挙げられるように思います。新しい発想は異質なものに触れることにより生まれることがあります。専門性を高めるとともに異なる文化に意識して近づく努力を忘れてはならないと感じます。現在は大学における男女比については改善されているようですが、海外にルーツを持つ学生はまだ少なく、理系の学生との交流も極めて限られています。四大学連合をさらに生かし、国立に引きこもりがちな学生に他大の授業を必修化するのも一考かと思います。また、国際性の面では例えば秋田にある国際教養大学のように全学生に一年間の留学を必修とする、英語で行う授業やディベートを増やす、あるいは立命館アジア太平洋大学のように教員にも学生にも海外出身者が当たり前について溶け込んでいるという状態に近づけば、元々優秀な学生たちに刺激が加わり化学反応が起きることが期待できます。

「ゼミナールの肖像」というお題に反して雑多な所感になってしまいましたが、大学での経験と出会いは私の宝となっています。

母校の益々の発展を願って、拙稿を締めくくりたいと思います。お付き合いいただきありがとうございました。

